

エディトリアル

市立恵那病院 副管理者 伊藤雄二

「女性の生涯を通したヘルスケアを考える」

女性の健康を考えると、私たちは思春期、妊娠・出産、更年期といったライフステージごとに問題を捉え、それぞれを異なる診療領域として扱ってきた。しかし女性の人生にとって、それらは決して分断されたものではない。若い時期の生活習慣や健康状態は将来の妊娠・出産に影響し、妊娠中に生じた健康問題は、その後の生活習慣病や心血管疾患のリスクを知らせる重要なサインとなる。そして、その影響は本人だけでなく、次の世代の健康にもつながっていく。

近年注目されているプレコンセプションケアは、単なる「妊娠前の準備」ではなく、妊娠を希望するか否かにかかわらず、すべての若い世代が自らの健康について知り、自分らしい人生を選択できるよう支援するものである。そこには当然、男性も含まれる。また女性のヘルスケアにおいて、妊娠する・しない、いつ妊娠するかを含め、自らの身体と人生について自ら選択する SRHR（性と生殖に関する健康と権利：Sexual and Reproductive Health and Rights）の視点が欠かせない。

一方、妊娠・出産は女性の健康にとって大きな転機でもある。妊娠糖尿病や妊娠高血圧症候群は、分娩とともに終わる一過性の問題ではなく、次の妊娠、さらには将来の糖尿病、高血圧、心血管疾患などのリスクを知る貴重な機会である。すなわちプレコンセプションケアのみならずインターコンセプションケアもまた、DOHaD（健康と疾病の発達起源：Developmental Origins of Health and Disease）の視点に立てば、妊娠期の健康は母親だけでなく、子ども、さらには次世代の健康へとつながっている。各執筆者にはこれらの問題について、それぞれの専門的な視点から女性の生涯を通したヘルスケアにどのように関連するのかを執筆いただいた。

こういった「時間を超えたヘルスケア」を支えるうえで、女性の生涯に地域で継続して関わることができる総合診療医の役割は大きい。

本特集では、プレコンセプションケア、SRHR、思春期・月経の問題から、妊娠合併症の産後管理、インターコンセプションケア、さらにはその長期予後、そして DOHaD に基づく世代を超えたケアまでを取り上げた。これらを個別の知識の習得だけではなく、女性の人生を途切れることなく支えるための継続したヘルスケアの視点で読んでいただきたい。本特集が、日々の診療の中でウィメンズヘルスに関わる機会を見つけ、女性の現在と未来、そして次の世代の健康を支える総合診療を考えるきっかけとなれば幸いである。
